

長崎街道雑記

長崎街道ネットワークの会

黒岩 竹二

一、街道と古代の官道

徳川家康は関ヶ原の合戦の翌年（慶長六一一六〇一）東海道に伝馬制を命じ、国内支配のため街道づくりを始めた。諫早地区では、破籠井から大村の鈴田へ抜ける長崎街道は昔のおもかげが残っており、「改変されざる長崎街道の一部」として貴重だと言うことで昭和五十二年三月諫早市史跡「大村街道」として指定されている。

我が国には、国家集権のため造られた道が二つある。それは古代律令国家（一三〇〇年前）のとき造られた駅路（古代官道）と徳川時代に造られた街道である。

古代の駅路は十六キロ毎に駅を置き、諫早方面では大村の新分駅（新分）から諫早の船越駅（船越）、それより島原半島の吾妻村山田（吾妻）と續いている。諫早より大村に行く「大村街道」は古代の官道と駅路とは約三キロ余り重なっている。

二、幕府の貿易都市長崎は要塞都市である。朱印船貿易の航海は江戸時代初期の三二年間に三五六回に及び西国諸大名や貿易船主の利益は莫大であった。

そのため幕府は各自の貿易利益独占とキリスト教を禁止するため寛永十六年（一六三九）ポルトガル船来航を禁止し、鎖国は完了した。そのため長崎の港は唯一の開港地となった。

以来、対外的門戸として開かれた我が国唯一の国際貿易都市長崎の警備は強化される事となり、寛永十八年（一六四一）には福岡黒田藩に、翌寛永十九年には佐賀鍋島藩の両藩に幕府は長崎港警備を命じている。以来元治元年（一八六四）に至るま



神大明稲荷一位正江津光

貢収入の六一七〇〇億円に迫っている。

諫早光江津の役割は、当時の幕藩体制下では城下町中心で藩は自給自足がたてまえであったが、多くの小藩では自給自足ができず、全国経済にまきこまれ各藩は特産品の生産に努め、全国にその販路を求めている。長崎の海外貿易は始めより全国的経済に組み込まれ、貿易都市長崎それに諫早の光江津は商品の運輸、流通面において大きな役割を果たしていた。

四、幕府最重要の世界情報（風説書）を急送した道

オランダ商館長フランソア・カロンに寛永十八年（一六四一）將軍の命令として「長崎に来航し、オランダ風説書を提出すればオランダ貿易を保証する」と告げられた。以来、オランダ・カピタンの風説書は安政四年（一八五七）までつづけられている。風説書は皮篋（かわかぶ）の御状箱に入れ、出島より江戸まで長崎街道を通り、継飛脚が江戸まで運んでいる。夜には高張提灯をつけて運んだという。

江戸で老中方は、風説書で入手した世界の情報を処理し、国策の決定に活用している。例えば寛文十三年（一六七三）英国船リターン号が来航し貿易の再開を要求した時、老中方は先の風説書を續んでいたので、英国のチャールズ二世の後はカトリック信者のポルトガル王の娘サリンと結婚し、英王室はカトリックと婚姻関係にある事を理由に、貿易再開の事を拒絶している。

又、幕府は長崎オランダ風説書の他にも、朝鮮国ならびに北京筋の風説も長崎に来航した唐船主や対馬藩宗家に手配し入手していた。その文書類は対馬歴史民俗資料館には「御連状」として、又島原藩には「華夷変態」として、それぞれ保存されている。

五、多良海道を歩く

諫早方面でも古民家が姿を消しつつある時、旧諫早領内の武家屋敷が一軒だけ残っている。その家は諫早市白浜町にある西山貞徳氏の住宅である。その家の由来は「第二代諫早領主・諫早直孝が、鍋島直茂の姫・長寿院を後室に迎えた時、西山家は姫について諫早に赴任しているようだ」と語っておられた。其の後、不審火で家屋が焼失し再建したのが文久二年（一八六二）である。その再建のとき多良山の御用林より用材を賜ったそうである。現当主の貞徳氏の長男・垣根涼介氏は吉川英治新人文学賞、山本周五郎賞など多くの文字賞を受賞され各方面より注目されている作家である。

（元長崎市教育長）

で約二〇〇年、両藩は長崎港の警備にあたってきた。

警備には兵船に早船、それに船頭五九〇人。警備番所は慶安二年（一六四九）西泊、戸町に築かれ、その陣屋敷は三、八〇〇坪。黒田藩は西泊。鍋島藩は戸町に詰めていた。

更に明暦元年（一六五四）には台場七ヶ所を幕府は平戸藩に命じて構築させている。平戸藩では当番年には三ヶ所、非番年には四ヶ所をそれぞれ預かっていた。この台場七ヶ所の外に、新台場三ヶ所。増台場四ヶ所が築かれ黒田藩・鍋島藩がそれぞれ担当し文化五十七年（一八〇八一〇）に構築し長崎警備を担当している。

この他に、遠見番所が寛永十三年（一六三六）以降、大村藩が十六ヶ所設営し、正保元年（一六四四）以降にも、深堀鍋島藩では五ヶ所設営している。

以上のように長崎港の警備には幕府は大いに意を用いていたので其の警備に必要な物資・人員の輸送のため長崎街道は重要な道路として幕府は大いに其の運営に意をもちいていた。

三、生糸を運ぶ道（シルクの道）

長崎での最大の輸入品は唐船の運んでくる白糸（生糸）であった。幕府は其の白糸取引のため慶長九年（一六〇四）糸割符制をもうけ、京都・堺・長崎・江戸・大坂五ヶ所の豪商に専売権を与えている。これらの白糸の荷は糸荷宰領が支配して長崎より諫早に運び、本明川の河口・光江津から「有明海」を渡り久留目に渡り、住吉に上げ、長崎街道山家宿に運び、ここで他の陸荷と合流して大阪江戸方面に運ばれている。明和二年（一七六五）より「東目通り」としてこの道順が定められた。

諫早の光江津には糸荷宰領によって正一位稲荷大明神（石造）が嘉永四年（一八五六）に再建されている。白糸の支払には大量の金銀があげられていた。新井白石による試算では、慶長六年（一六〇一）から宝永五年（一七〇八）まで一〇八年間の年平均は四三六億円であり、幕府年

風信

〇十一月三日は文化の日である。戦後・文化財保護法が新たに制定されたのは昭和二十四年であった。以来、私は長崎県・市の文化財の調査に先輩方の御指導をうけ参加させて戴いてきた。

〇中でも最大の思い出は、宮内庁正倉院事務所長より昭和六十一年、同六十二年の「正倉院所蔵玳瑁瑠璃製宝物調査」の依頼をうけ奈良市正倉院に出張させて戴いた事である。正倉院では主任調査官の関根真隆、同木村法光両先生の指導を受け、御物調査に参加させて戴いた事である。

〇この時、私は長崎における亀甲技法の長老菊池藤一郎翁と材質専門家として永沼武二氏にも御協力をあおぎ、奈良まで出張していたゞき調査に御協力いたゞいた事も思い出し、感謝申し上げている。

〇先日長崎市文化財課副主幹原田宏子女士・来訪され「一昨年末、市町村合併に伴い指定文化財が増加したので、新年度の文化財誌追録発刊のため加筆したので一応、校正していただき度い」と連絡にこられた。新年度には、きつとすばらしい「長崎市文化財誌」が発刊される事を楽しみにしている。

〇一昨日、長崎市中町教会の野下神父様より、神父様が指導されている「市民セミナー」の打ち合わせの為、お会いしたいとの連絡であった。神父様と色々とお話しをするうちに「長崎には毎朝、教会の鐘、寺の鐘（かね）音が聞かれましたが、近頃は、あまり聞こえませんか」と言われた。そういうえば、之の教会のすぐ近くに住んでおられた斎藤茂吉の歌集「つゆじも」に次の二首がある。

中町の天主堂の鐘ちかく聞き 二たびの夏 過ぎむとすらし

聖福寺の鐘の音ちかし かさなれる家の豊を 越えつつ きこゆ

〇長崎文献社より「秘蔵・長崎くんち絵巻」を戴く。この絵巻は、本来住友家の所蔵であったのでその昔、長崎にあった大坂住友家長崎支店の注文で長崎で描かれたものと考えられる。時代は十九世紀前半の製作で、作者は長崎町絵師であると考える。長崎くんち資料としては大いに参考になるものであり、原田博二・河野謙両先生の論考、大変興味を持って読ませて戴いた。

（長崎文献社刊・三、八〇〇円）

長崎歴史文化協会研究室

TEL 八二二一 一五四〇
十八銀行公会堂前出張所 二F

